

《神学大全》

——思想のゴシック建築——

柴 田 平 三 郎

トマスについてとりわけ顕著なことは、極めて多岐にわたる要素を吸収同化し、一つの総体のうちに体系的に配列しようとする、彼の強靱な力である。トマスは思想の偉大な建築家に例えられてきた。彼の著作は、一個の見事にまとまった建築、力強い構造であり、そこでは、当時の大聖堂におけると同様、節度が簡潔さに、堅牢さが高度に単純化された輪郭の優雅さに、それぞれこの上なく一体化しているのである。

G・フライレ／T・ウルダノス⁽¹⁾

序

トマス・アクイナスの文字通り膨大な著作群のなかから、一口に「社会・政治思想」と呼びうるような一定の思

惟形態が析出できる主なテキストがあるとすれば、それは彼の最大の「神学」に関する総合的・体系的書物『神学大全』(Summa Theologiae, 以下、STと略)にほかならない、ということについては疑問を差し挟む余地はないだろう。

もちろん社会・政治思想を扱うのであれば、さらに『君主政治論』やアリストテレスの『倫理学』と『政治学』に関する『註解』、あるいは『対異教徒大全』や『ペトルス・ロンバルドゥス命題集註解』といった著作が適宜に参照されねばならないのはいわずもがなのことだ。

そのことを指摘したうえで、なおかつ『神学大全』がトマスの社会・政治思想を知るための最も広範で、豊饒な根本資料であることに変わりはない。とすれば、この壮大な思想(神学・哲学)の建築物といわれる書物——実際、しばしばゴシックの大聖堂に例えられる——が一体、どのような構成と内容から作られているのか、を確認しないでは、私たちの課題は一步も先に進むことはできない。

トマスにとって、神学という大きな枠組みのなかに収められる社会や政治についての思考とは結局のところ、何だったのか。その解答を求めるために、彼の建造物の内部に足を踏み入れることにしよう。

I 『神学大全』——意図と動機

『神学大全』とは、一体どのような書物なのか。このあまりにも有名な著作についてはすでに無数の解説書や研究書が書かれており、いまさらの感なきにしもあらず、といったところではあるが、改めてトマスの意図を忠実に追ってみることにしよう。トマスはこの書を一体、どのような心積もりで書こうとしたのか。それに関しては、ト

マス自身がこの書全体の「序文」(prologus)で明らかにしている。まずその全文を引用してみる。

「教的真理の教授(catholicae veritatis doctor)の位置にある者は、学の進んだひとびとを教える務めを有するにとどまらない。さらに初学者たちを教導する(incipientes erudire)もまた、その任務に属しているのであつた。それはあたかも使徒の、『私はあなたがたをキリストにおける小児と考え、乳を飲ませて、堅い食物は与えなかつた。』という『コリント人への第一書簡』第三章(第一節)の言のごとくでなくてはならぬ。今、この著作における我々の意図するところのねらいも、キリスト教に属する諸般のこと(ea quae ad Christianam religionem pertinent)を、まさしく初学者たちの教導(eruditionem incipientium)に適應するところに従つて伝えるにある。

けだし我々は、この教への入門者たち(huius doctrinae novitos)が、さまざまなひとびとの手に成るこれまでの諸著作において、非常な障害を被っていることに注目せざるをえなかつたのであつて、それはすなわち、一つには、こうした諸著作における無益な問題・項・論議の重複(multiplicatio inutilium quaestionum, articulorum et argumentorum)のゆえであり、さらに一つには、こうした人々の必ず知っておくべきことがら(学問の秩序(ordo disciplinae))に従つて伝えられず、却つて諸書の解説の仕事の要求するがままに、或いは討論の機会の到来するがままに与えられて来たからであり、いま一つにはまた、その際同じことがらの頻繁な反復(frequens eorundem repetitio)が読者の心のうぎに倦怠と混乱(fastidium et confusio)を生むのを常とするからであつた。

我々は、それゆえ、これらの乃至はこれに類する欠陥を避ける工夫に努めたい。そして聖教(sacra doctrina)に属する諸般のことがらを題材の許すかぎりの簡潔かつ明晰な仕方(以て追求するという仕事を、神助に信頼しつつ試みたいと思う)。(ST, prologus.)

ここに明白なように、トマスは「キリスト教に属する諸般のことがら」を「初学者たち」を導くに相応しい仕方

で教えること(「初学者の教導」)のために、この書を書くのだ、と述べている。つまり、キリスト教の何たるかを初心者に教えるための入門書を、というのがその執筆の「意図」であることがわかる。

だが、意図はそれで了解しえたにしても、そもそもトマスはなぜそうした意図のもとに、この書を書くことにしたのか。それは「入門者たち」がこれまでの同種の書物から「非常な障害を被っていることに注目せざるをえなかった」からだ。これが「動機」であるが、トマスは入門者たちの被ってきた障害の原因として三つ挙げている。すなわち、そうした著作が(一)「無益な問題・項・論議(論証)の重複」にすぎないこと、(二)きちんとした「学問(学習)の秩序」にもとづいて書かれていないこと、そして最後に(三)「同じことがらの頻繁な反復」でしかなく、かえって「倦怠と混乱」とのもたになっていること、である。

これらの指摘に関しては、多少の補足説明が必要かもしれない。どういうことを指しているのだろうか。

周知のことだが、西欧の各地ではだいたい十二世紀から十三世紀にかけて大学(universitas, studium generale)が誕生するが、そこを中心——もちろん大学の成立以前に、そして大学と並行して、学校(scolia)組織が存在した。農村的な修道院付属学校の衰退以後は都市的な教座聖堂付属学校(オルレアン、ラン、ランス、シャルトル、パリなどの)が、それから私学校(アベラルドゥスのようなタイプの知識人の依拠したパリを中心とする北フランスなどの)が活発な学問・研究活動をおこなった——として神学・哲学の研究(スコラ学)が盛んにおこなわれるようになった。このスコラ学の基礎となるのが過去の偉大な著作家たち、とりわけアンブロシウスやヒエロニムス、アウグスティヌスや大グレゴリウスら教父たちの言葉や教説をまとめた『命題集』(Sententiae)で、とくに十二世紀中葉にパリの司教座聖堂付属学校の教授でありパリ司教ともなったベトルス・ロンバルドゥス——「命題集の師」(Magister Sententiarum)と呼ばれた——による『命題集』はやがて多くの註解書を生み、同じく

聖書の註解書を別にすれば、中世で最も広く利用されたスコラ学の標準教科書となった。⁽³⁾

こうして主として聖書とペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』の二つをテキストとして中世の大学や学校では講義(lectio)や討論(disputatio)がおこなわれたわけであるが、トマスも当時の慣例にならってこの二つの講義からその教授経歴を開始したのはいりまでもない。すなわち、一二四八年から五一年まではケルン大学でアルベルト・マグヌスのもとで聖書学講師をつとめ、一二五二年にはパリに出て、まずドミニコ会のサン・ジャック修道院で命題集講師を、ついでパリ大学神学部において命題集講師として聖書とペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』の両方の講義をおこない、一二五六年に教授に正式に就任したのである。

ところで、トマスの経歴に関する確かな研究によれば、⁽⁴⁾彼が『神学大全』第一部に着手したのは、一二六六年、ローマにおいて、ということになっている。この時期というのは、第一回パリ大学神学部時代(一二五二―五九年)がおわり、ドミニコ会の方針にしたがってイタリア各地での教授活動(一二五九―六八年)に携わっているときである。この第一部は二年後の一二六八年に完成するが、ちなみに、ついで第二部が完成するのは一二六九―七二年の第二回パリ大学神学部時代で、そして第三部(未完)に着手したのは最晩年の故郷ナポリ滞在中のことである。⁽⁵⁾

このように、『神学大全』の執筆時期を見てみれば、トマスが初心者のための神学の入門書の必要性を痛感したのはほかならぬ彼自身の教授経歴そのものから湧き出る感情だったことが理解できる。⁽⁵⁾つまり、彼はその最初の教授体験からしてすぐさま、当時の隆盛を極めるスコラ学のうちに、ともすれば徒らな煩雑化の傾向や問題の無益な反復などが存在することを実感したのである。「無益な問題・項・論議の重複」、「学問の秩序」の無視、「同一の」とがらの反復」が「読者の心のうちに倦怠と混乱とを生むのを常とする」という指摘は彼の率直な気持ちの吐露

だったにちがいない。

と同時に、この執筆開始時期についての事実関係にもう一度注目し直してみると、そこには『神学大全』成立の動機をめぐる一層深い理由があるような気がする。繰り返しになるが、トマスが初学者のための神学の適切な入門書の必要性を痛感し、実際にそのために『神学大全』の稿を起こしたのが、パリ大学神学部での最初の教授活動を体験した後、イタリア各地での教授活動を精力的におこなっていた時期だということのうちには、もっと直接的な理由があるのではないだろうか。

一言でいえば、その理由とは、この時期にトマスに向けられていた敵しい反感の眼、言い換えるとパリ大学神学部における在俗(教区)司祭教授団の、托鉢修道会所属教授に対する明からさまざまな敵意の眼差し、に対して、けつして怯むことなく、決然として対抗しようとするトマスの心のうちに秘められたつよい意志が働いたということである。

既に別稿において指摘しておいたように、この時期、新興の托鉢修道会ドミニコ会に属するトマスが新任の神学教授の職務を果たすべくパリ大学神学部にやってきたときに、そこで彼を待ち受けていたのはサンタムールのギョームによって代表される在俗(教区)司祭の教授団による熾烈な反托鉢修道会攻撃だった。これには、それなりの理由が存在した。すなわち、長い時間をかけてみずから自治権をもった、独立の法人団体「ギルド (universitas)」として自立せしめてきたパリ大学神学部の在俗教授団側からすれば、新参の托鉢修道会員教授の存在は、大学の学則や慣行を無視し、自分たちの修道会の規則やローマ教皇の権威のみを尊重しようとする、許しがたき敵対者に映っていたのである。

こうした両者の敵しい対立の過程のなかで、一体、托鉢修道会とはいかなる性格の団体なのか、が鋭く問われは

じめる。そうしてこの托鉢修道会の使命と、「講解(聖書を教義学的に講義)し、討論(諸問題を討論裁定して解決を与える)し、説教」し、さらに「聴罪」するといふ在俗司祭の職務とは本来的に両立しえないとするサンタムールのギョームの反托鉢修道会攻撃の書『現今の危険思想について』が公にされるが、これに応えてトマスは『神の礼拝と尊崇を攻撃する者たちへの論駁』を書いて托鉢修道会の理想と使命を明らかにすることになる。

トマスが『神学大全』なる神学の体系的な入門書を書こうとした意図のうちには、おそらく彼自身のこのような学問教授経歴上の△体験▽が深く横たわっていると見てまず間違はないだろう。つまり、トマスにはトマスなりに、この事態へのある秘められた確信が生じ、もともと同じ托鉢修道会ながら、会祖アッソジのフランシスコの愛と敬虔を至上の原理とするフランシスコ会とはいささか異なつて、「学問」へのつよい拘りを隠さないことで知られるドミニコ会の性格もそこに働いて、トマスは托鉢修道会所属の学者として、神学の初心者に、それまでとはまったく趣の異なつた、新しい良質で有益な入門書を提供しようと決意したのではなからうか。

そのような仮定の上に立つて、彼自身が挙げた、従来の神学・哲学の著作の「非常な障害」、つまり入門者たちを「倦怠と混乱」とに陥れている三つの原因についてのトマスの指摘ぶりに改めて目を落とすと、その背後から彼の学者としての並々ならぬ自負の息遣いが聞こえてくるような気がする。次に挙げるのはトマスの最初期の教授ぶりを伝えるトッコのギレルムスの証言であるが、それを読むと、トマスがいかに先行する形態とは異なつた、斬新な講義をおこなつて聴講生の間につよい印象を与えていたかが手にとるようにわかるだろう。

「学士となつた彼(トマス)が、寡黙によつて秘するよう期していたことを講義を通じ外に放ち始めると、神はあまりに多くの学問を彼に授けられ、彼の唇に神からのあまりに多くの学説が満ち溢れたので、あらゆる人々、教師たちを凌駕し、学説の明晰さによつて他の人々より一層学生たちを学問への愛に導いたことは明らかであつた。

なぜなら、講義のなかで、新しい項目を取り扱い、確定を行う新しく、明晰な方法を見出し、確定において新しい論拠をさらに導入していたので、彼自身が新しい事柄を教え、新しい論拠によって疑義を明確にするのを聴いた人は、誰もが、彼を神が新しい光の放射によって照らしているのを疑わなかった。(トマスが)一度判断に確信を持つと、(その確信たるや)新しい見解を神が新たに注ぎ込まれたものとして、教え書き記すことをためらわぬほどであった。⁽⁸⁾

II 大全 (Summa) とはなにか

『神学大全』と普通訳されるこの書物のラテン語の原題は、『スンマ・テオロギアエ』(Summa theologiae)である。つまり、「神学」(theologia)の「大全」(summa)というのがその原義ということになるが、ではこの「スンマ」とは一体、どういう意味なのか。

ラテン語辞典で「スンマ」の項をひくと、「総額」、「全(総)体」、「要点」、「頂上」、「最高の地位」といった意味がでているが、シュヌーの指摘によると、この語が特定の使われ方をするようになるのは十二世紀のことだとする。すなわち、「この言葉を創造した十二世紀の学校の用語では、スンマは、キリスト教教義の真理を提示することを目的とする『諸命題』(ないしはなんらかの一群の教義)の、簡潔明瞭で総合的で完全なる集成物を意味していた。……もはや教父や古代著作家の格言の単なる編纂物ではなく、むしろ緻密に組織的に構成された資料集⁽⁹⁾がスンマであった。」

シュヌーはサン＝ヴィクトルのフーゴーのものと長くみなされてきた有名な集成が、まさにこの意味における

『諸命題のスンマ』(*Summa sententiarum*)と呼ばれたといい、さらにいくつかの事例を紹介している。⁽¹⁰⁾ それによると、オータンのホノリウスは『キリスト教小史』を執筆したさい、その書物を『スンマ』と呼び、こう述べたという。「これは『全体のスンマ』(*Summa totius*)と名付けられるのが相応しい。なぜなら聖書全体のなかに現れている一連の出来事がこの書のなかに要約された形で含まれているからだ。」(*Summa totius de omnimoda historia*; P. L., 172, 189A.)

あるいは、アベラルドゥスの例も紹介されている。アベラルドゥスは「使徒信条」について、これは信仰の真理そのもの (*summam fidei*) を含むものだ、と語っている。また『神学への誘い』のなかで彼は、救済の本質を構成していると彼にとって思われる三つのことに関する事柄を整理した。「その三つというのは、人間の救済の『要約』(*summa*) をなすもので、信仰、慈愛、秘蹟である。」(*Introductio ad theologiam*, Lib. I.c.1; P. L., 178, 981C.)

このようにして、十二世紀という世紀の間に、「スンマ」は、それまでの単なる語句の集成にすぎない『命題集』(*Sententiae*) や『詞華集』(*Florilegia*) にとってかわって、学問の諸領域における主要な著述形式となつて、次の十三世紀へと引き継がれることになる。実際、十三世紀には、ひろく学問の諸領域において、この種の「スンマ」が沢山作成されたが、例えばロベルトゥス・グロセステのものといわれる『哲学のスンマ』(*Summa philosophiae*)、ススのアソリの『法のスンマ』(*Summa iuris*)、ギヨーム・ペロウの『諸徳のスンマ』(*Summa de virtutibus*) といった著作の出現は、単に神学の領域だけにとどまらず、知識や学問の諸領域全般にわたつて、いかに「簡潔明瞭な総合化」が求められるにいたつたか、を如実に示している。⁽¹¹⁾ ちなみに、神学の「スンマ」としては、もちろんトマス『神学大全』がはじめてではなく、パリ大学教授で、イギリス生まれのフランシスコ会士アレクサンデル・ハレンシスの著した『神学のスンマ(大全)』(*Summa theologiae*) が「十三世紀最初の偉大な作

品¹²⁾とされるのはよく知られた事実であろう。

だが、それにしても、十二世紀後半から十三世紀半ばにかけて成立する「スンマ」の形式がそれまでの著述形式を凌駕していく背後には、一体いかなる事情があったのか。いまさらいうまでもないことだが、それは新しい知の磁場¹³⁾—大学を中心とするスコラ学の成立である。

十二世紀以降、司教座聖堂付属学校や私学校、大学においておこなわれるようになった神学の研究と教育はそれ以前の修道院を中心とする神学のあり方とは根本的に異なった様相を呈しはじめ¹³⁾る。すなわち、後者の場合、神学はひとえに「修德的・神秘的あるいは救済史的・典礼的枠組み」の内部においておこなわれるものであり、修道士たちにとっての「観想や靈的経験と密着した神認識の助け」にほかならなかった。これに対して、前者における神学(スコラ学)はなによりも「積極的な司牧活動のための教育」という点に著しい特徴をもっている。とくに十三世紀に入ると、ドミニコ会とフランシスコ会の二つの托鉢修道会が新約聖書に記された「使徒的生活」への憧れや司牧と伝道への情熱に導かれて、新しい学問の府—大学と深くかかわりをもつようになり、大学における神学の教師(Magister)たちは以前の観想的で修德的な神学の枠内にとどまることは到底できなくなった。その間の事情はリーゼンフーバーの言葉を借りれば、次のように説明できよう。

「大学の教師は、もはや個人的な読書ではなく講義を指す『購読』(lectio)、十二世紀には神学的な真理探求と教育の訓練となっていた『討論』(disputatio)、神学研究において獲得されるものの伝達である『説教』(praedictio)において、信仰知を公に体言する者でなければならなかった。人間の尊厳や自然の秩序、理性的思索力に対する新たな意識が芽生えたことで、十一世紀の後半以降は古典ラテン語文学の精神的価値が、そして十二世紀後半から十三世紀半ばにかけては古代哲学の新たな意義が発見されるに至り、神学的『權威』(auctoritas)と並んで哲学的『理

性』(ratio)が強く賞揚されるようになった。ここでは神学は、内的に経験可能な知恵への欲求によってというよりも、むしろ言語的に伝達可能で、論証上説得力のある知への意欲によって駆り立てられたのである。それに応じて『論証』(argumentum)、『区別』(distinctio)、『解答』(responsio)、『解決』(solutio)といった言葉が方法上の基礎概念となる。学問的、つまりスコラ学的方法を特徴づけ、一二〇〇年以降の神学的『大全』を生み出したものは、文献の逐語的註釈である『註記』(glossa)ではなく、あるテキストと問題を体系的に取り上げ、弁証論的方法を通じて解決に導くような『問題』(quaestio)なのである。¹⁴⁾

このように、十三世紀にはスコラ学ははっきりと「權威」に訴えるよりも「理性」と「言語」によって論証可能な「学問」としての神学の確立を弁証論的方法——つまり、ある命題をいくつかの問題に区分し、そこに含まれる各々の主題を肯定する論証と否定する論証によって推論し、最終的解決を導出する——を媒介として目指すようになる。それには、十一世紀後半以降の「古典ラテン語文学の精神的価値」と、十二世紀後半から十三世紀半ばにかけての「古代哲学の新たな意義」——主にアリストテレスの受容を指すのはいうまでもない——の「発見」に大いに触発されたという側面があるわけだが、それらと並行して、もちろんこのスコラ学的方法がすでに十二世紀のうちに、教父の格言や公会議・教皇の宣言を収集整理して教会法の体系的便覧を作ったグラティアヌス(『グラティアヌス法令集』)や、神学や哲学の諸問題において教父たちの遺した相異なる命題を弁証論的に解決したアベラルドゥス(『然りと否』)らによってその先鞭をつけられていたことも、改めて指摘するまでもないことだ。

いずれにせよ、「スンマ(大全)」という著述形式が神学・哲学におけるスコラ学の成立と並行しつつ、それに体系的な言語表現を与えるものとして生み出されたことに疑いの余地はない。シュヌーはしたがって、「スンマ」とい

う言葉が次のような三重の目的をもって作り出された著作のことを指すと結論づけている。すなわち、(一)ある知識分野の全体を、簡潔かつ明瞭な仕方⁽¹⁵⁾で註解すること(これが「スンマ」のオリジナルな意味である)、(二)その知識分野の対象を個々の分析を越えて、総合的に組織化すること、そして(三)その成果が学生の教育に適用できるようにさせるために書かれること、である。

Ⅲ 思想のゴシック建築

トマスの『神学大全』こそは、神学の領域の全体にわたる実に目も眩むばかりの膨大な諸問題を、一つの総体のうちに体系的に配列し、それらに簡潔で明瞭な解決を与えた「スンマ」中の「スンマ」、文字通り「神学」の「スンマ」の代名詞にほかならぬ、という評価はけっして揺らぐことはない。

その場合、忘れることなく言及されるのは、この著作と、当時の西欧世界の大都市の各地に次々と建設されていった壮大なゴシック建築様式の大聖堂との親和性である。例えば、それは次のような表現によつて的確に説明されよう。冒頭にも書き出しておいたが、ある哲學家たちの言葉を改めて引用してみる。

「トマスについてとりわけ顕著なことは、極めて多岐にわたる要素を吸収同化し、一つの総体のうちに体系的に配列しようとする、彼の強靱な力である。トマスは思想の偉大な建築家に例えられてきた。彼の著作は、一個の見事にまとまった建築、力強い構造であり、そこでは、当時の大聖堂におけると同様、節度が簡潔さに、堅牢さが単純化された輪郭の優雅さに、それぞれこの上なく一体化しているのである。いかなる哲學者も、概念の純化された正確さにおいて、また、論述の厳格な体系的構成において、トマスに匹敵する者はいない。各要素は、それに対応

する適切な場を占め、先行する諸要素に依拠しながら、同時にそれに続く諸要素の支えとなっている。これは厳密な連鎖であり、その中では多数の連鎖の環の何一つ切り離されることなく、個々の環すべてが互いに全体のなかで強固に結びついているのである。⁽¹⁹⁾

トマスの『神学大全』とゴシックの大聖堂との類似性・親和性を指摘し、両者のなかに中世の「秩序」概念を見出す論者は多い。

例えば、中世美術史の権威O・フォン・ジムノン⁽¹⁷⁾はゴシック建築に関する有名な著書『ゴシックの大聖堂』(一九五六年)を執筆しているが、その副題は「ゴシック建築の起源と中世の秩序概念」と銘打たれている。彼によれば、ゴシックの建築形式の決定的特徴は通常いわれているような、「交差リブヴォールト」でも「尖頭アーチ」でも「飛び梁」(これらはすでにプレゴシック建築によって展開ないし準備されていた)でもなく、「光の使い方」と「構造とみかけの間の独特の關係」にあるという。「二、一三世紀にとっては光はあらゆる視覚的な美の源泉であり本質であった。サン＝ヴィクトルのユークとトマス・アクィナス⁽¹⁸⁾はどちらも大きく異なった思想家たちがともに、二つの主要な特徴を美しきものの特性とみなしている。部分の協和あるいは比例と、そして光輝性である。」

ジムノンはさらにこう語っている。「中世の思想家たちによれば光は秩序と価値の原理である。ものの客観的価値はそれが光を共にする程度によって決定される。そして光り輝く事物を見て喜びを経験することにおいて、われわれは存在物のヒエラルヒーのうちにそれらの存在論的価値を直感的に把握するのである。」⁽¹⁹⁾

光の形而上学と幾何学的秩序、これこそがゴシック建築の二大特徴だ、というのがジムノンの結論とするところであるが、例えば『神学大全』のなかのトマスの次のような言葉を想起すると、確かに彼の見解に同意せざるをえないだろう。

「恩寵は、光が太陽の存在によって大氣のなかにもたらされるように、神の存在によって人々のなかにもたらされる。」(ST, III, q. 7, a. 12)

『美しき』には三つの条件が要求される。第一は、充天性、すなわち完全性である。そこなわれたものは、まさにそのこと自身のゆえに醜いのである。第二は、然るべき対比即ち一致である。そして第三は、明るさであって、輝かしい色を有するものが美しいといわれるのはこのゆえである。」(ST. I, q. 39, a. 8)

トマス・アキナスについての研究者の一人で、彼自身もアキナスと同じドミニコ会に属する修道士でもあるトマス・オメーラは最新の研究書(一九九七年)のなかで『神学大全』に関する注目すべき知見を披瀝している。同書で、彼は「中世文化と『神学大全』なる表題の一節を設け、「秩序」がいかに中世の人びとにとって重大であったかを指摘している。

『秩序』(ordo)は、芸術家、法学者、神学者、建築家たちを魅了した。多様な主題やメディアを一つの調和のとれた全体へとつながるのに、秩序ほどに刺激的で、奥深い———精妙ないし大胆な———ものが果たして存在したであろうか。⁽²⁰⁾

このように語ったのちに、オメーラはゴシックの大聖堂と『スンマ』とが中世の秩序観を表す点において同一の構造をもっていることを先行する学者たちの意見を紹介しつつ、改めて強調している。

「中世は『神学』においてと同様に、石とステンド・グラスによっても『スンマ』を作り出した。十二世紀には新しい建築物(それより前の『ロマネスク』様式と対比して、のちに『ゴシック』と軽蔑的に呼ばれるようになる)が自由と総合から一つの建築物を生み出した。尖頭アーチは天上を指し示し、そうしてアーチはより重いものを支えるがゆえに、壁面は自由であった。何人かの想像的な人びとは赤と青、黄色と緑のガラスでそれを満たすこ

を思いついた。色彩に彩られた光が内部に降り注いだ。神学者たちの助言を受けながら建築家たちが大聖堂のバラ窓を作る際に直面した課題というのは、大学教授たちが神学の簡潔明瞭な著作（スンマ）の構想を練る際に直面したのと同じ課題、つまり多様性と秩序という課題であった。ちょうど光が太陽からやってきて、色刷りガラスを通して教会の内部に注がれるのと同じように、神は救済史の各出来事を通して個々の精神のなかに恩寵を注ぐのである。⁽²⁾

ゴシックの建築様式の大聖堂と、神学の総合的な体系書である『スンマ』との間に深い内的な連関が存在することを誰よりも鋭く、詳細に明らかにした学者といえ、『ゴシック建築とスコラ学』（一九五一年）——表題そのものに注目されたい——を著したアーウィン・パノフスキーを置いて他にないというのは今日の常識であろう。まずは彼のこういう言葉に耳を傾けてみよう。

「ゴシックの建造物の建設者たちがジルベール・ド・ボレヤトマス・アクィナスを原典で読んだということはほとんどありえない。しかしながら彼らは他の無数の仕方でもスコラ学的観点にさらされていた。彼らは、自らの仕事の性質上、必然的に、典礼的な、また図像学的な計画を考案した人びとと仕事上連携せざるをえなかった事実は別としても。彼らは学校に行った。彼らは説教を聴いた。彼らは公開の自由討論会〔*disputationes de quolibet*〕に出席することができた。それらは、当時の考えうるあらゆる問題を論じて、今日のオペラや音楽会や公開講座に似ていなくもないような社会的行事に発展していったものである。そしてまた、彼らはその他の多くの機会に学問ある人びとと接しえて有益なこともあった。自然科学も、人文学も、数学さえも、それぞれの特殊な秘教的方法や用語法を展開させることがなかったというまさにこの事実のために、人間の知識の全体は普通の非専門的な知性の持主という広がりなかに保持されていたのである。そして、おそらく最も重要な点なのであるが、社会制度全体が

都市的な専門家主義に向かって急速に変化しつつあった。これまでのところまだのちのギルドや『建築工人組合』組織にまで固まっていなかったとはいえ、それは、聖職者と俗人、詩人と法律家、学者と職人はほとんど同等の立場で寄り合いうる会合の場を提供した。程度の差はあれ大学によってきびしく監督されてお雇いの写字生の助けをかりて写本を大量に「en masse」つくり出している都会住まいの専門的な出版人「stationarius」ここから英語の stationer「文具商」という語が生まれた」が、本屋「一七〇年頃から記録されている」や貸本屋や製本屋や写本彩飾師「十三世紀の頃までに彩飾師 enlumineurs がすでにパリの一つの街路の全体を占めていた」とともに出現した。そして都会住まいの専門的な画家、彫刻家、宝石細工師が。そしてまた、通常は聖職者であるがその生活の実質を著述と教育に捧げている都会住まいの専門的学者「ここから「スコラ学者」 scholastic と「スコラ学」 scholasticism という語が生まれた」が。そして最後に、しかし最も重要でないということもないが、都会住まいの専門的建築家が。⁽²²⁾

長い引用をあえてしたが、私たちにはすでに永劫に失われてしまった知のありよう、つまり自然科学と人文科学との間にいささかの垣根もなく、「人間の知識の全体」が「普通の非専門的な知性の持主という広がり」のなかに保持されて「おり、それでいてしかも「社会制度全体が都市的な専門家主義に向かって急速に変化しつつ」ありながら、「聖職者と俗人、詩人と法律家、学者と職人」が「ほとんど同等の立場で寄り合いうる会合の場を提供」するような、そうした十三世紀の都市の世界の息吹を彷彿とさせるような一節である。

それはともかく、パノフスキーによれば、こういう知の世界にあって、「ゴシック建築とスコラ学の間には、時間と場所という純粹に事実の領域において、とても偶然とは思えない明白な同時発生が存在している。」⁽²³⁾という。そして、この両者に共通の原理をつぎのように読み解くのである。

すなわち、神のつくった存在の秩序を明らかにすること——ハマニフェスタティオV (manifestatio || 顕示)——、この明瞭化の原理が初期および盛期スコラ学の第一原理ともいふべきものであり、第二原理は相矛盾する二つのものを和解させるハコンコルダンティアV (concordantia)の原理である。この二つの原理のうち、とくに第一のハマニフェスタティオVの原理に関連してさらにいえば、それは、「聖なる教え「神学」は、信仰を証明するためではなく、この教えに示されているその他すべてのことを明瞭にするために (manifestare)、人間の理性を使うのである」(ST. 1, q. 8, a. 2) というトマス・アクィナスの言に窺われるように、人間理性のなすべき仕事にほかならない。そしてこのマニフェスタティオの原理には以下の三つの要件が必要となるというのである。(一) 全体性「十分な列举」、(二) 相同な部分と部分との、一つの体系に従った配列「十分な分節化」、(三) 明確性と演繹的説得性「十分な相関性」がそれである。⁽²⁴⁾

ここで、この三つの要件の一つ一つがどのようにスコラ学の『スンマ』とゴシックの大聖堂の双方において貫かれているか、を具体的かつ詳細に見ることはしない。それはパノフスキーの著述に譲るほかはない。ただ、彼がそこで一貫して主張しているのは、ゴシック建築の構造的特徴をなす、骨格における二つの相反する要素、上下の柱の間の垂直的連続性と内部の壁面の水平的方向性とが、あるいはまた正面の扉口上方に配された円型のバラ窓の異質性が、大聖堂という複雑で錯綜した骨組みと壁面の組み合わせからなる一つの建造物全体の秩序空間のなかで実にもみごとに調和され、総合されているという事実の指摘である。

パノフスキーによれば、それはまさしくスコラ学者たちが苦心のすえに作り上げた解決法であり、その典型例がトマスの『神学大全』であるということになる。つまり、この著作の著述形式の構造は教父たちの伝統的・正統的な教説に対して、異教のアリストテレスの新命題をもちこんで両者の和解と統合を図るというものであるが、こう

したスコラの解決法をゴシック大聖堂の建築家たちもまた踏襲しているというのである。それは、「見かけは和解できないように見えるものを和解させるといふ、そしてアリストテレスの論理学の同化を通して芸術と言えるほどに完成された」ところの「技術」にほかならない。⁽²⁵⁾ この技術は次のように組み立てられている。すなわち、それぞれの「論題」(『神学大全』における各々の「項」 *articulus*) がまず「問題」(*questio*) として定式化されねばならない。その論議においては、はじめに一組の権威が提示される(以下のように思われる。 *videtur quod...*)。それに対して、他の権威がもちだされて反論がなされる(しかしこれとは反対に *sed contra...*)。そして最後に両者を調和させるべく解決が図られる(「以上に答えて、私は次のように言わなければならない。 *respondeo dicendum...*」)。⁽²⁶⁾

ゴシックの建築家たちが相矛盾した諸要素の調和を図り、究極的な和解を達成させて、壮麗な大聖堂の建造物を完成させた方法は、実にこういうスコラの思弁法にもとづいていた。神の被造物とその被造物からなる宇宙的秩序の全体構造を明らかにさせようとする壮大な思想のゴシック建築——トマスの試みた『神学大全』はまさにそう呼ばれるに相応しい。最後に、オメーラの言葉をもって結ぼう。

「アキナスは、建築家が建てられつつある中世の建築物の全体を、パリのシテ島の建築現場で材木や石材や滑車に囲まれて、監督するのを目撃していた。塔の計画を立案することから彫刻の主題を選ぶことまで、あらゆる技術の監督者として、アキナスは『親方』のような者であったし、石工や彫刻家の師のような者でもあった。彼は、その活動がいくつかの分野を指導し、その知恵がもっとも壮大で、もっとも広範囲な最高の因を求めることであるとところの神学の教師のような者であった(ST. I. q. I. a. 6)。もちろん、神こそが宇宙の建築家にほかならなかった。しかし、人類もまた、知恵と技術に従事しているかぎり、材料を用いて新しい形態を作り上げることがで

きるのであった。⁽²⁷⁾」

Ⅳ 『神学大全』の全体構造——神学と哲学

思想のゴシック建築といわれる『神学大全』は、全体として、どのような構造的骨組み(構成)をもって構築されているのか。これについては、トマス自身が次のように説明している。

「さて、既述によって明らかかなことへ、この聖教の主要な意図(*principalis intentio hujus sacrae doctrinae*)は神についての認識を伝える(*Dei cognitionem tradere*)にあり、それも然し、単にそれ自身においてあるかぎりにおける神にとどまらず、更にまた、諸々の事物の、そして特に理性を有する被造物(*rationalis creaturae*)の、根源(*principium*)でありかつその究極(*finis*)でもあるかぎりにおける神についてであるがゆえに、こうした教えの解説をこころざす我々としても、やはり、以下において、第一に『神について *de Deo*』、第二には『理性的被造物の神への運動について *de motu rationalis creaturae in Deum*』、第三には『キリスト——即ち、人間でありたもうかぎりにおいて、我々にとつての、神に赴くための道なる——について *de Christo, qui, secundum quod homo, via est nobis tendendi in Deum*』^{論ずるべきことなるがゆえに}」(*ST. I, q. 2*)

これによると、『神学大全』という書物は、「神についての認識を伝える」こと、それも「単にそれ自身においてあるかぎりにおける神」についてだけでなく、「諸々の事物」の、とりわけ「理性を有する被造物」すなわち「人間」の「根源(始源)」であり「究極(目的)」である「神」についての認識を伝えること」に、その基本目的があるということがわかる。

そして、この目的にしたがって、この書は三部構成に分かたれることが明示されている。すなわち、第一部 (Pars Prima) は「神について」であり、第二部 (Pars Secunda) は「理性的被造物 (人間) の神への運動について」、最後の第三部 (Pars Tertia) は「人間でありたもうかがりにおいて、我々にとっての、神に赴くための道」である「キリストについて」である。

このように、『神学大全』の全体的構成は、これを言い換えれば、(一) 神論、(二) 人間論、(三) キリスト論という三つの柱から形成されていることが理解されるが、上記の箇所 (ST. I, q. 2) に引き続き、トマスは第一部「神について」の考察がさらに三つのテーマに細分化されると語っている。すなわち、(1) 「神の本質」に関する事柄、(2) 「ペルソナの区別」に関わる事柄、(3) 「被造物の神からの発出」に関わる事柄、が扱われる。これらはいま少し詳細にいうと、(1) では、世界の存在の第一原因である神の存在が「五つの途」によって証明され、神の本質、神は何であるか (何でないか)、神の働き (知性・意志・能力)、神の至福、が考察され、(2) では、一なる神のうち三つのペルソナ (父・子・聖霊) の区別、つまり三位一体が論じられる。(3) では、神からの被造物の発出、悪の問題、被造物の区別 (天使・物体・人間)、被造物の保存と統宰、が論じられる。

第二部および第三部に関しては、どうだろうか。これも、トマス自身による説明があるが、それと研究者たちの解説によって補足しておく。²⁸⁾ 第二部「理性的被造物 (人間) の神への運動」は次のようになっていっている。すなわち、この部は、神の似像としての人間の問題を扱っており、基本的に倫理神学ないし倫理学として考えられている。

大きく二部に分かれる。まず最初 (第二―第一部 Prima Secundae) は、一般倫理を扱い、人間の究極目的とそのための人間の行為が論じられる。究極目的とは幸福 (至福) のことであるが、人間は自らの理性と意志によって幸福にいたる行為を行う。そして、その行為の善し悪しによって究極目的に到達しうるか、それから逸脱するかが決定さ

れる。それゆえ、人間の行為の考察は行為それ自体と行為の根源ないし原因についてなされ、併せて情念(非理性的被造物たる動物と共通)の問題も論じられる。また、人間の行為の根源に関して、人間に内在的なものと外在的なものが区別され、前者では人間の魂の能力とその習態(徳と悪徳)、後者では人間を誘惑する悪魔と神(法と恩寵を通じて人間を動かす)が論じられる。

次に第二―二部(Secunda Secunda)においては、特殊倫理が扱われる。すべての人間に関わる事柄として、いわゆる対神徳(信仰・希望・愛)と、枢要徳(賢慮・正義・剛毅・節制)、および特別の人間たちに関わる恩寵としての予言・脱魂・奇跡、が論じられる。また、観想的な生活と活動的な生活との区分、職分と身分の区別、司牧者の身分と修道者の身分が論じられる。

最後の第三部「神に向かうための道なるキリスト」は、次のようである。救世主たるイエス・キリストとその授ける恩恵(恩寵)とが扱われるが、最初にキリストの受肉について、そしてキリストの誕生・生涯・受難・復活・昇天が論じられる。次にキリストの施す秘跡(洗礼・堅信・聖体・告解・終油・叙解・婚姻)が、終わりに世の終末が論じられる。ただし、この最後の部分はトマスによっては完成されず、残余(正確には、「告解」の続きから「終末——復活と審判」まで)は弟子たちによって「補遺[Supplementum]」として完成された。

以上が、『神学大全』三部の全体の構成である。繰り返しになるが、ここにはまず神自身と神からの万物(被造物)の発出(第一部)、そのなかでとくに人間(理性的被造物)の、神へと還帰していく運動(第二部)、そしてその神のもとへと還帰していく道であるキリスト(第三部)というテーマが展開されている。

ところで、こういう「発出」(exiis)と「還帰」(reditus)という観念それ自体はきわめて新プラトン主義的であるのは周知のことであろう。したがって、この点を衝いてトマスはキリスト教信仰をギリシア哲学へと還元せしめ

たとか、あるいはギリシア哲学に屈服したのだ、といった批判が古くから存在してきたこともまたよく知られている。

しかし、多くの学者たちが正当に指摘しているように⁽²⁹⁾、このトマス批判は正鵠を得てはいない。理由は簡単である。『神学大全』で展開されているのは、新プラトン主義のいうような、一者からの「流出」とそれへの「還帰」という自然必然的なプロセスにおいて想定されているものでは断じてない。そうではなく、創造主たる神の自由な意志と行為によって創造された万物（人間を含む、すべての被造物）がその始源であり究極目的である神へと立ち戻っていくこと、より厳密に言えば、神の被造物としての人間が神と人間との仲介者たるキリストを通して神へと還帰していくという「創造」と「救済」の神学にはかならないからである。

ここで忘れずに言及しておかねばならないのは、『神学大全』(Summa Theologiae) は文字通り、「神学」(theologia) の「スンマ」(summa) と銘打たれてはいるものの、トマス自身はその「神学」という名で展開する内容を「テオロギア」とは呼ばずに、「サクラ・ドクトリーナ||聖なる教え(聖教)」(sacra doctrina) という語で語っている事実である。この事実の意味をきちんと確認しないでは、『神学大全』の何たるか、をけっして理解することはできないだろう。では、トマスにとって、「聖なる教え」とは何なのか。

それを知るためには、『神学大全』第一部冒頭(第一問題 聖教(sacra doctrina)について——それはどのような性質のものであるか、またその及ぶところ如何)の問いに目を凝らすことが大事である。この第一問題(questio)は全部で一〇の項目(articulus)をもっているが、その最初の第一項は「哲学的諸学問のほかに個別の教えの行われる必要があるか」という問いである。ここに「哲学」(philosophia)——「哲学的諸学問」(philosophiae disciplinae)——という言葉が使用されているが、こういう設問の仕方それ自体のうちに、実はトマスに

あつては、哲学(つまり「信仰(fides)」によらずに、人間「理性(ratio)」に固有の能力にもとづいておこなわれる探求や認識)がすでにそれ自身の権利をもって成立しているという事実がわかるといえよう。言い換えれば、トマスは明らかに哲学の存在を前提にした上で、なおそのほかに別の教え＝神学(「聖なる教え」)が必要なのか、を問うているのである。そこで、この第一項の議論を簡単に要約してみよう。議論は無論のこと、例のスコラの思弁法——①「異論」(videtur quod...)・②「反対異論」(sed contra...)・③「正文」(respondeo dicendum quod...)・④「異論解答」(ad primum ergo dicendum quod...)——に沿っておこなわれている。すなわち、

①「第一については次のようにすめられる。哲学的諸学問のほかになお別個の教えが行われる必要はない、と考えられる。」——その論拠をトマスは二つ挙げている。一つは、「汝より高きものを尋ねるな。」(『集会書』三・二十二)といわれるように、人間は理性を超える事柄を探求すべきではない。理性のもとに属する事柄については、すでに哲学的諸学問において十分伝えられている。二つは、「真と有とは置換される」というスコラの原理にもとづき有(存在するもの)についての教えは哲学的諸学問のなかに含まれている。アリストテレスもいうように(「形而上学」第六卷)、神に関する教えもまたその例外ではなく、哲学の一部門としての「神学」(theologia)がすでに存在する。

②「しかし、その反対にこういわれる。」——『テモテへの第二の書簡』(三・十六)にあるように、「聖書はすべて神感によるものであって、教え、戒め、矯正し、義に導くために有用である」。しかるに、神感による書は人間理性によって発見された哲学的諸学問には属さない。したがって、哲学的諸学問のほかに別個の学は有用である。

③「以上に答えて、私はこういわなければならない。」——「人間救済のためには(ad salutem humanam)」、人間理性を以て探求されるところの哲学的諸学問のほかに、なお神の啓示にもとづく或る種の教えの存することが必

要であった」。その理由は、(一) 人間は神を目的として神に向かって秩序づけられている。しかし、この目的は理性の把握を超えている。それゆえ、人間理性を超えた或る事柄が神の啓示によって知らされることは人間救済のために必要なであった。(二) 神について人間理性によって追求されうる事柄に關しても、人間は神の啓示を受ける必要があった。なぜなら神についての真理がもっぱら理性によって追求されるとするならば、それはごく少数の人びとにのみ、しかも長い時間と幾多の誤謬をまじえてかろうじて得られるものにすぎない。したがって、救済がより適切確実に人びとにもたらされるために、神の事柄について神の啓示によって教えられることが必要であった。

このように、トマスは「異論」・「反対異論」・「主文」を展開し、理性によって探求される哲学的諸学問(哲学)のほかに、人間にとって神の啓示による「聖なる教え」(神学)が必要であったことをよく主張しているが、最後の④「異論解答」のところで、①「異論」で挙げられた二つの論拠について再度論じている。すなわち、(一) 人間の認識能力を超える事柄に關しては、確かに理性による探求は間違っている。神の啓示するところを信仰によって受容すべきで、聖なる教えはまさにそのような事柄において成り立っている。(二) 認識対象を構成する観点(ayō)が異なっていれば、学の性格も当然異なる。同じ結論——「地球は丸い」——を論証するのでも、天文学と自然学とは異なった方法を採る。それゆえ、同じ事柄でも「自然理性の光によって認識されうるものであるかぎり」において扱う哲学的諸学問と「神の啓示の光によって認識されうるものであるかぎり」において扱う学とは異なつて当然であるとし、その末尾をこう締めくくっている。

「このようなわけで、聖なる教え(sacra doctrina)に属する神学(theologia)と、哲学(philosophia)の一部門とされるあの神学(theologia)とは、類的に異なつているのである。」

同じ「神学」でも、聖なる教えとしての神学と哲学的諸学問の一部門としての神学とは認識対象の観点が異なつ

ており、前者が啓示の光のもとに知られるものを対象とするのに対して、後者は自然理性の光のもとで知られるものを対象とする、とトマスは語っている。この議論はすでに『ボエティウス三位一体論註解』(第五問第四項主文)で「聖書神学」と「哲学的神学」という語彙で、また後の神学者たちによって「啓示神学」と「自然神学」として論じられていたものであるが、それはともかくとして「聖なる教え」(神学)とは何か、を問う『神学大全』第一部第一問題(全十項)の第一項ではややくも展開されているのは、信仰と理性、神学と哲学の関係についての問いにはかならない。そして、いまま、以上に見たところによれば、トマスはまず人間理性に固有の能力にもとづく探求と認識の領域(哲学)の存在を承認した上で、理性による把握を超えた神の啓示に属する事柄を信仰によって認識する領域(神学)の必要性を語っている。これがまさにトマスのいう「聖なる教え」であるが、この教えの存在理由はひとえに「人間の救済のため」であり、その救済がより適切確実にもたらされるためにも自然理性による探求の領域はこの聖なる教えのうちに包摂されるとみなされているといつてよいであらう。

信仰と理性、神学と哲学の関係ということでいえば、この第一問題のなかでは第五項(「聖なる教えは他の諸学に優位するものであるか」)が注目されねばならない。ここで、①「異論」(「聖なる教えは他の諸学に優位するものではない」)に対する②「反対異論」のなかで、トマスは有名な「哲学は神学の奴婢」(ancilla theologiae)という言葉を用いている。それはこういふふうである。

「しかし反対に、『箴言』(九・三)に、『彼は婢を遣わして、町の高い所に呼ばわらせた』とあるのによれば、他の諸学(aliae scientiae)はこの教えの婢(ancillae huius)であるといわれている。」

これを受けて、③「主文」が続くが、そこで聖なる教えが思弁的、実践的な学を併せて、他の一切の学を超越する位置にあること、その理由は確実性と題材において優れているゆえであること、を挙げて、哲学に対するこの学

の優位を主張している。

ところで、こういうノトーリアスな言葉の引用の事実に引きずられて、トマスが人間理性を頭から疑い、哲学を軽視しているとみなすとしたら、とんでもない誤解であろう。彼が哲学を蔑視しないどころか、その存在を十分に承認していることはすでに第一項の議論そのものから自明であるが、その哲学と神学（聖なる教え）との関係に関して「建築家」と「工人」の比喩を用いて説明しているのを目にすると、いっそうそれが明瞭となる。

「この教え（聖なる教え）こそ、人間のあらゆる智慧のうちにあつて何ものにもまして智慧（sapientia）である。つまり、智慧といつても決して何らか或る分野におけるそれではなく、無条件的な意味におけるそれなのである。けだし、智者の本領は秩序づけ判断するにあり、判断とは、然るに、高次の因を通じてその下位にあるところの事柄について行われるものなるがゆえに、それぞれの分野において、その最高の因を視野に持つ人が、その道の智者と呼ばれる。例えば、建築（aedificum）という分野にあつては、家の姿を構想する工人（artifex qui disponit formam domus）がこの道の智者（sapiens）と呼ばれるものであり、彼はまた、石を切ったり、漆喰を用意したりする下級の工人たち（inferiorum artificum, qui dolant lapides, vel parant cementum）から区別して特に建築家（architector）と呼ばれる。『コリント人への第一の手紙』（三：二十三）に、『私は智き建築家のように先ず土台を据えた。』とあるのはこのゆえである。」（ST, I, q. 1, a. 6.）

これは第六項（「この教えは智慧であるか」）（「主文」）の一節であるが、見てのとおり、家（究極目的）を建てるものの「建築家」（architector）と「工人」（artifex）の関係が神学（theologia）と哲学（philosophia）の関係を示す場合の比喩として語られている。

この比喩はトマスが好むもので、『神学大全』全巻にしばしば用いられているが、「家の姿を構想する」工人＝建

建築家が「石を切ったり漆喰を用意したり」する工人よりも上位の位置に立つ「智者」とされているとはいへ、家の建築に従事する点で両者は同じ工人に属するだけでなく、実際に建築現場で資材を扱う石工や左官などの工人たちはそれぞれの専門の分野では独立の技術を發揮する技術者として認められているという含意がここにはあるといえよう。なぜならば、これらの工人たちの優れた技術が前提としてなければ、建築家は家を構想し完成させることが到底できないからだ。そしてこれと同様なことが、神学と哲学との関係についても指摘できよう。つまり、哲学(理性)は基本的に神学(信仰)の指導下にあり、神学に奉仕するものとはいへ、それ固有の独立した活動領域をもっており、その領域の範囲内において卓越した能力を發揮することが期待されているのである。

このようにして、トマスにおいて神学と哲学、信仰と理性との関係を指し示す基本原理としてのあの有名な命題——「恩寵は自然を廢することなく、かえってこれを完成する。 *gratia non tollit naturam, sed perficit.*」——の真の意味が立ち現れてくる。意味は既にして明らかであろうが、それをトマス自身の言葉で確認してみよう。

「それにしても聖なる教えは人間理性をも用いる。しかしそれは理性によって信仰を証明するためではない。そういうことをすれば信仰の価値は失われるであろう。この教えが理性を用いるのは、この教えのなかで伝えられるほか他の事柄を明瞭にするためである。実際、恩寵は自然を廢することなく、かえってこれを完成するものであるから、(*Cum igitur gratia non tollat naturam, sed perficiat.*)、あたかも意志の自然的傾向性が愛徳に奉仕するように、自然理性は信仰に従わなければならないのである。」(ST, I, q. 1, a. 8)

超自然的恩寵としての信仰と自然本性としての理性、この両者は無論のこと、次元を異にするものではあるが、けっして相互に矛盾する関係にあるのではない。むしろ恩寵は自然を完成するものである。言い換えれば、理性は信仰の内容を完全に明らかにすることはできないが、信仰を通して獲得されたものをより明瞭にするための確かな

役割を担うのである。

さて、このようにみてきて明らかなのは、『神学大全』において哲学（理性）は「聖なる教え」としての神学（信仰）に奉仕すべく、そのなかに組み込まれているということである。組み込まれている、という表現が幾分不正確だとするならば、包みこまれていて、といってもよい。要するに、この両者の関係は絶対的な隔絶とか対立とかいうのではなく、人間理性の自然本性的な光に照らされた認識や探求（哲学）はそれ自身の固有の領域を確実に認められながら、その上で神の啓示の光のもとに知られる学（神学）のなかに大きく包摂されているのである。トマスが「聖なる教え」という言葉のうちに表現しようとしたのはまさにこうした意味にはかならない。「神について」（第一部）、「理性的被造物（人間）の神への運動」（第二部）、「人間の、神に赴くための道であるキリスト」（第三部）という全体構成が明らかに指し示すように、『神学大全』が追求する「聖なる教え」とは、神の被造物としてこの世に生まれた人間が神と人間との仲介者たるキリストを通して神へと還帰していく「創造」と「救済」の神学のことであったのは改めて繰り返すまでもないであろう。

結

例えての話、『神学大全』のことをゴシックの大聖堂とか、ゴシックの大伽藍に等しいなどとはよくいったものだ。

確かに、目に痛いほどに複雑で多様な諸々の部分や要素を貪欲に吸収同化して、それらに統一的な調和と秩序を賦与し、一個の見事にまとまった壮大な構築物が仕立て上げられたという意味で、『神学大全』がゴシック様式の大

聖堂に例えられるのは自然の成り行きだろう。

なにせ、西欧十三世紀は「トマスの世紀」(F・ステーンベルヘン)ともいわれるぐらいであるから、この世紀の西欧世界の大都市に陸統と建立されていた、天にも届けと言わんばかりの高い尖塔とリブ(肋骨)を利用したアーチ型天井をもつ巨大な大聖堂の存在は、神学者トマス・アクィナスその人の思想的大きさをいまに伝える壮麗な形容詞の役目をも果たしているようだ。

しかし、トマスの生き、思索した十三世紀の思想的現場に降りたってみると、トマスはけっして諸手を挙げて称賛されるような存在ではなかった。いやそれどころか、アリストテレスをはじめとしてギリシア、アラブ、ビザンティンその他の、キリスト教の陣営からはとかくうさん臭く、異質に見える思想原理を偏見なく受容するのを憚らないような印象を与えていた彼は、絶えず疑惑と中傷と警戒の眼差しに晒されていたのである。

その意味においては、『神学大全』はそうしたトマスの時代への果敢な挑発の書とでもいえるかもしれない。少なくとも、私たちは、私たちの想像力の翼を思いきり広げて、いまだ列聖される以前のトマス、そしてカトリックの最大の神学的教科書という公式の評価を受けるにいたる以前の、『神学大全』に近づいていく努力をしなければならぬ。本稿はそのための、準備段階のほんの一步にすぎない。

注

(1) G・フライレ/T・ウルダノス『西洋哲学史 中世Ⅴ』M・アロモス/山根和平/水戸博之訳、新生社、一九九七年、二一—三頁。

(2) 『神学大全』(Summa Theologiae)は現在、三六分冊の予定で刊行継続中の邦訳(創文社、一九六〇年〜)がある。完成

が待望される。また、第一部(全一一九問中の、第一問―第二六問まで)のみの抄訳として、山田晶訳『世界の名著 トマス・アキィナス 神学大全』中央公論社、一九七五年)があるが、詳細な訳注がつけられており、きわめて有益である。本稿での引用は、この二つの邦訳に基本的にしたがっているが、訳文を若干変えさせていた場合があるのをお断りしておく。また、引用に関しては、引用箇所を明記するだけにし、邦訳のある場合でも、邦訳書の頁数は一々記すこととはしない。なお、ラテン語は必要に応じて適宜、いわゆるレオ版もしくはレオニナ版 (*Editio Leonina*; *Sancti Thomae Aquinatis Opera Omnia, iussu impensaque Leonis XIII, P. M., edita. Tomi N-XII. Summa Theologiae cum Comm. Card. Thomae de Vio Caietani. 1888-1906*) によって補った。

(3) 大学の成立に至る中世の教育制度と『命題集』と『スンマ』に代表される教養教材、さらにはスコラ学の文学的形式など、中世の神学一般についての平易な入門書としては、W・デッドロップ『中世ヨーロッパ神学』坂口昂吉訳、南窓社、一九八八年が優れている。

(4) J. A. Weisheipl, *Friar Thomas D' Aquino*, Basil Blackwell, Oxford, 1974, p. 216ff. Jean Pierre Torrel, *Saint Thomas Aquinas*, vol. I, The Catholic University of American Press, 1993, p. 142ff.

(5) ウィイスハイプは『神学大全』における「神学」(Sacra Doctrina)の意味に関する論稿を次のようにはじめている。「聖トマス・アキィナスの『神学大全』は個人的な経験―初心者に神学を教えようとする経験―の結果であった。」J. A. Weisheipl, "The Meaning of Sacra Doctrina in Summa Theologiae I, q. 1.", *The Thomist*, vol. 38, 1974, p. 49.

(6) 拙稿『歴史舞台の上のトマス』―中世の夏―十三世紀(『獨協法学』第五十一号、二〇〇〇年)を参照のこと。

(7) 同じ托鉢修道会ながら、フランシスコ会に比してミニニコ会の「学問的」傾向はつとに知られていることであるが、トマスは『神学大全』(第二―二部第一八八問題第五項)のなかで、「観想的な生活」と「活動的な生活」の双方から修道会の学問研究が必須であることを主張している。

(8) Guilelmus de Tocco, *Vita Sancti Thomae*, c. 3 n. 15: 訳文はG・フライレ/T・ウルダノス、前掲書、四二五頁に拠った。

(9) M.-D. Chenu, *Introduction a L'Etude de Saint Thomas d' Aquin*, Vrin, Paris, 1950, p. 255.

(10) *ibid.*, p. 255ff.

- (11) *ibid.*, p. 256, n. 2.
- (12) Frederick B. Artz, *The Mind of The Middle Ages*, The University of Chicago Press, 1953, p. 261. ライヤー、グランドに、アンリー・オズボーン・テイラーの言葉を引用しておく。「ラテン・キリストが普及拡大していく過程を、中世の知的発展の主要な側面から見てみると、そこに三段階のあるのがわかる。すなわち、まず熱心な学習、次により活力に満ちた吸収、最後に思想のさらなる要素を付け加えた、その再表現である。この同じ過程を公教の熟達と教義の再表現という外的な形態の発展からみると、そこにも三つの段階があった。すなわち、最初は聖書の『註解』、次に『命題集』、そして最後に『神学大全』である。そしてこの『神学大全』の究極の創造者こそは、トマス・アクィナスであった。」Henry Osborn Taylor, *The Mediaeval Mind*, vol. 1, Harvard University Press, 1966 (1911), p. 18.
- (13) M. -D. Chenu, *Nature, Man and Society in the Twelfth Century*, University of Toront Press, 1997 (1957), pp. 300-309.
- (14) K. ・リーゼンフーバー『中世哲学の源流』(上智大学中世思想研究所 中世研究叢書) 創文社、一九九五年、一四九—一五〇頁。
- (15) M. -D. Chenu, *op. cit* (1950), p. 256.
- (16) G. フライレ/T・ウルダノス、前掲書、二二—二三頁。
- (17) O. フォン・ジムソン『ゴシックの大聖堂 ゴシック建築の起源と中世の秩序概念』前川道郎訳、みすず書房、一九八五年、三頁。
- (18) 同、四二頁。
- (19) 同、四三頁。
- (20) Thomas O'Meara, *Thomas Aquinas Theologian*, University of Notre Dame Press, 1997, p. p. 45.
- (21) *ibid.*, p. 47.
- (22) アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』前川道郎訳、平凡社、一九八七年、三五—三七頁。なお、ついでながら、以下のパノフスキーの説に関するのは、Jess M. Gellrich, *The Idea of the Book in the Middle Ages: Language Theory, Mythology, and Fiction*, Cornell University Press, 1985, p. 69ff. が詳しい解説を収めている。

- (23) 同、八頁。
- (24) 同、四一頁以下。
- (25) 同、九一頁。
- (26) 同、九一頁。
- (27) Thomas O'Meara, *op. cit.*, p. 51.
- (28) S. T., II-I, prol. q. 1.; II-II, prol. q. 1.; III, prol.
- (29) M. D. Chenu, *op. cit.* (1950), p. 260ff. 稻垣良典『トマス・アキィナス』勸草書房、一九七九年、四四頁以下…五二頁以下。山田晶「聖トマス・アキィナスと『神学大全』」(前掲、『世界の名著トマス・アキィナス』五八頁以下…同『シンマ』第三部について)、『神学大全』25創文社、一九九七年、四二七―四四五頁)。なお、本節全体の叙述は、とくに稲垣、山田両氏の「解説」に負うところが多い。併せて、とくに『神学大全』第一部第一問題における「聖なる教え」(Sacra Doctrina)の概念に関しては、以下を参照した。J. A. Weisheipl, *op. cit.* (1974); T. C. O'Brien, "Sacra Doctrina" Revised: The Context of Medieval Education", *The Thomist*, vol. 41, 1977, pp. 475-509.
- (30) ファン・ステーンムルヘン『十三世紀革命』青木靖三訳、みすず書房、一九六八年、八頁。